第二百十回読游会　二〇一三年七月十三日

討論したの「行飯暮帰」と題する詩。『陸放翁鑑賞』放翁鑑賞その二。発表者、傍島史奈。

行飯暮帰　　行飯して暮れて帰る

1　宿疾去如掃　　宿疾去ること掃うが如く
2　出門芒屩軽　　門を出でて芒屩軽し
3　菊叢寒蝶鬧　　菊叢　寒蝶　鬧れ
4　楓葉夕陽明　　楓葉　夕陽　明らかなり
5　結陣看鴉集　　陣を結びて鴉の集まるを看
6　銜衣喜犬迎　　衣を銜えて犬の迎うるを喜ぶ
7　踟躇搔白首　　踟躇して白首を搔くは
8　詩句入経営　　詩句　経営に入ればなり

▽五言律詩。下平八庚の韻（軽・明・迎・営）。紹熙三年（一一九二）冬、六十八歳、山陰での作。『剣南詩稿』巻二十五。

詩題（行飯暮帰）について。

「行飯」については、『鑑賞』の注に「行は行薬といふ場合の行と同じく、飯後食物の消化をよくするための散歩のことである。これは放翁の新造語かもしれないと云ふことは、前（「山家暮春」と題する詩の注）にも書いておいた」とある。百六十九回読游会でも少し議論されている。興膳先生、≪「行飯」については、村上哲見さんの著書、『陸游』（一九八三年、集英社）に考察があります。そこでは最初に『斎居紀事』という随筆を引いて、このように紹介しています。「食罷わらば行くこと五七十歩にして、然る後に襟を解げ帯を褫き、枕を低くして少しく臥す。此れ養生の最急事なり」。村上さんはこれに関連して「陸游の詩題や詩句のなかの至るところに「行飯」ということばがみえる。この語自体はあまり見かけないし、通常の辞典などにもみえないけれども、陸游の詩の多くの用例からいって、旧来の白話小説などに時おりみえる「行食」と同じ、つまり食後の散歩をいうにちがいない」と述べています。この本は『漢語大詞典』が出る前に書かれているので、「通常の辞典などにもみえない」とありますが、後に出た『漢語大詞典』には、「行飯」が見えて、陸游の詩「山家暮春」（二首之二、巻二十四）の句を引いている。「行飯独相羊、扶藜過野塘」。それから、『鑑賞』に言う「行薬」は、もっと古くからあって、「村東」と題する詩（巻二十六）に見え、『校注』は、六朝の鮑照の「行薬して城東橋に至る」と題する詩、これは『文選』にも入っているんですが、それを注に引いています。私が考えるには、鮑照より前の時代に、「行散」という言葉から来ているのに違いない。散は、五石散という不老長生のための薬のことで、劇薬で飲むと熱が出る。それを発散させるために歩き回る。魯迅の講演「魏晋の気風および文章と薬および酒の関係」（而已集）の中に詳しく説明してあります。「行散」のほうが「行薬」

より古く、魏晋の頃です。それで「行飯」とか「行食」とかの造語は、元をたどれば、「行散」から来ているだろう、というのが私の説です》。「暮帰」について、「暮れに」と名詞で読むのがいいか、「暮れて」と動詞で読むのがいいか、出席者からの質問があった。興膳先生、《もともと名詞とか動詞とか区別があったわけではないので、これはどちらでも解釈できますね》。別の参加者が、「暮帰」には通常とは違って、暮れ方になるほど遅く帰宅することになった、という意味合いがあると教わったことがあると指摘した。

第一、二句（宿疾去如掃、出門芒屩軽）について。

『鑑賞』は、次のように注している。「健康状態がよくなってゐると云ふことは、前にも書いたが、ここに「宿疾去りて掃ふが如し」とあり、愈ゝ気分の良ささうなことを思はす」。興膳先生、《「掃うが如し」は、きれいさっぱり長患いが治ったということでしょうね。すっきりとした気分で、「門を出でて芒屩軽し」、足取り軽く散歩に出かけた、ということでしょう》。「芒屩」は、わらぐつ。発表者は、陸游のウォーキングシューズだと指摘する。

第三、四句（菊叢寒蝶鬧、楓葉夕陽明）について。

『鑑賞』には、次のような注があり、類似の表現が別の詩に見えることを指摘する。「別に「歩して近村に至る」と題する詩あれども、「薬物扶持、疾漸く平かに、布裘絮帽、柴荊を出づ。荒堤雨を経て牛跡多く、村舎人なくして碓声あり。数蝶香を弄して寒菊晩れ、万鴉陣を回して夕楓明かなり」など云ひて、ほぼここの詩と内容を同じくするがゆゑに、別に録せず。ただ「村舎人なくして碓声あり」は、好句の一つだと思はれる」。「菊叢」と「寒蝶」について、発表者は、この詩が立冬を過ぎて詠まれていることを踏まえて、季節はずれのものだとした。筧先生、《立冬は、太陽暦で言えば十一月の初旬。菊が満開なのは、むしろ当たり前なのではないですか》。興膳先生、《「寒蝶」も、季節はずれだとするのは疑問です。私は動植物には詳しくはありませんが、例えば「寒蝉」という語が中国の詩にしきりに出て来て、日本ではヒグラシと訳しています。ところがよく読んでみると、もっと秋が深まった時期の蝉で、どうも日本のヒグラシとも違うという印象を持っています。ここの「寒蝶」も、この時期に出て来る蝶のことではないかと思います》。参加者が、白居易の「遊悟真寺詩」に「元和九年秋、八月月上弦。……林幽不逢人、寒蝶飛翩翩」とあることを指摘した。興膳先生、《晩秋から初冬にかけて飛んでいる蝶のことじゃないかな。「鬧」とあるので、蝶がたくさん群がり飛んでいる有様ですね》。「楓」について、発表者はカラカエデと訳した。『続一海知義の漢詩道場』「晩秋あれこれ」参照。興膳先生、《対の句は、「楓葉」カエデの葉に夕陽があかあかと照らしているということですね。陸游は、一、二句で述べるように、病気が治って気分が爽快だから、三、四句に出てくる風景も非常に活発ですね》。

第五、六句（結陣看鴉集、銜衣喜犬迎）について。

興膳先生、《「鴉」ですが、烏の字は古くから詩に出てくるけれど、鴉の方は六朝の詩には非常に少なくて、『文選』にも出て来ない。『説文』にも見えない。それなら、漢以前になかったかというと、あることはある。『荘子』斉物論に「鴟鴉（しあ）は鼠を耆（この）む（鴟鴉耆鼠）」という文が見えるくらいで、ほとんど使われていない。六朝の詩句に見える数少ない古い例としては、隋の煬帝に「寒鴉飛数点、流水遶孤村」（『筆塵』に見える）というのがある。鴉の字は唐詩には見えるけれど、それ以前では使用例が少ないことに、調べていて気がつきました》。カラスは、夕暮れ時の物として詩によく詠まれるのではないかという意見が出た。興膳先生、《詩語

としては暮鴉というのがあります。夕方とは縁が深いですね》。「犬」について。『鑑賞』は、「散歩して帰つて来ると、犬がとんで来て、着物を銜へて喜ぶなり」と注している。興膳先生、《今どき人は犬を連れて散歩するのが普通ですが、陸游は犬を家に置いて一人で散歩したんですね》。参加者、「当時、犬は放し飼いでしょうね。平安時代、猫はひもを付けて飼っていたと聞きましたが」。別の参加者、「犬と猫なんですけど、銭鍾書の『管錐篇』の『太平広記』の部分に、人が昇天するとき、犬は付いていくのに、猫は付いていかない、ということについて、いろいろと蘊蓄を傾けています。犬はその人を好むけれど、猫はその土地を好むみたいで、そのことを西洋の例まで引いて、考証しています。だから、犬は人に付いて昇天するけれど、猫は付いていかないのだそうです。この句の犬が迎えに来る部分は、犬でないといけないんだなあと思いました」。興膳先生、《それは日本でも普通に言われていて、「犬は人につき、猫は家につく」ですね》。「迎」の読みについて、『鑑賞』も発表者も、「迎うを」と読んでいた。興膳先生、《ここは「犬の迎うることを喜ぶ」のだから、「迎うる」と読まないといけません。この二句は詩だから、この順番になっているけれど、散文として読むならば、「鴉の陣を結びて集まるを看、犬の衣を銜えて迎うるを喜ぶ（看鴉結陣集、喜犬銜衣迎）」と、なるでしょう》。

第七、八句（踟躇搔白首、詩句入経営）について。

第七句は、『詩経』邶風「静女」を踏まえていること、発表者が注している。「静女其れ姝し、我を城隅に俟つ。愛すれども見えず、首を搔きて踟躕す（静女其姝、俟我於城隅。愛而不見、搔首踟躕）」。首を搔く行為は、期待していることが実現されないもどかしさを表している。『鑑賞』は、この二句を「踟躇して白首を搔くは、詩句経営に入れるなり」と読み、「詩句を考へて、そのために踟躇してゐるのだ、との意」と注している。発表者も、第七句が結果で、第八句が原因である解釈に沿って、「経営に入ればなり」と読みかえた。参加者から、「踟躇して白首を搔き、詩句経営に入る」と、並列に読めないかとの質問が出た。興膳先生、《もちろん、そのようにも読めます。双声語の「踟躕」を二句の初めに置いていて、畳韻語の「経営」を結びに使っています。これは意図的に使っていると思います。「踟躕」は、うろうろ、「経営」は、ぐるぐる、という語感と関連しているんですね。うろうろとしていて、詩の構想がぐるぐると頭の中を巡る、と並列の関係にも読めます。ただし、どちらがよいのかというと、どうでしょうか。どちらとも言えない。あとは好みの問題です》。

時間が少し余ったので、村上哲見氏の『陸游』で紹介されている、「行飯」について、興膳先生が解説された。《『斎居紀事』という随筆を引いているところを読みますと、「朝晡に粥飯・湯餅の属を食するに、皆な当に腹中に余地有らしむべし。魚肉は僅かに以って飯を下す可し。酒を按ずるに則ち已に多ければ尤も害を為す」。陸游がこんなことを言っているんですね。飲み過ぎたら身体に悪いと。飲み過ぎたという詩をいっぱい作っているんですが。「若し偶たま一物を食して多ければ、則ち当に一物を減じて以って之を乗除す。如し湯餅稍や多ければ則ち飯を減ず。飯稍や多ければ則ち肉を減ず。要は此の数に過ぎず」。ここまでは「食」の方です。そして次です。「食罷わらば行くこと五七十歩にして、然る後に襟を解げ帯を褫き、枕を低くして少しく臥す。此れ養生の最急事なり」（朝晡食粥飯湯餅之属、皆当令腹中有余地。魚肉僅可以下飯。按酒則已多尤為害。若偶食一物多、則当減一物以乗除之。如湯餅稍多則減飯。飯稍多則減肉。要不過此数。食罷、行五

七十歩、然後解襟褫帯、低枕少臥。此養生最急事也）。これは村上さんが書いていますが、貝原益軒の『養生訓』と非常に共通するところがある。それから次のようにまとめています。「以上、陸游の晩年の生活ぶりについて目につくことを列挙してみると、①菜食主義、②過食を避ける（肥満しない）、③体をよく動かす（散歩、畑仕事）、というようなことになり、なんのことはない、最近よく成人病予防とか健康の秘訣などと喧伝されていることとすこしも違わず、陸游が八十五歳の長寿を保ち、最後まで元気だったのは、決して偶然ではなかったことがわかる」とあります》。大笑い。《「行飯」について言えば、「行くこと五七十歩」ですから、家の周りを歩いたくらいでしょうか》。参加者「歩というのは距離の単位のことかも知れませんね。確か一歩が六尺（宋代は一歩が五尺）だったと思います」。興膳先生《だから一足で行けるくらいの距離でしょう》。「中国の一歩は、日本の二歩に相当するらしいです」。興膳先生《それでも、そんなに違わない》。筧先生《まあ「五十歩百歩」やな》。笑い。

興膳先生、《意見がなくなったようですから、この辺にしましょうか。正座して一時間もすれば、いつも足がしびれて来るんですが、今日は珍しく何ともなかった。気が付いたら座布団が二枚敷いてありました》。笑い。《お気遣いありがとうございました》。